対馬丸遭難学童問題について

元対馬丸遺族会会長
外間　宏栄

◇　学童疎開の状況

昭和１９年７月、政府の緊急閣議決定に基づいて「学童疎開を早急に実施する」との発表が学校からなされた。疎開の目的は軍の作戦行動の邪魔にならないよう、また、乏しい食糧の確保、学童を安全な地に移し将来的な資源の確保等のための国策だと説明を受けた。

学校では父母や学童に対し熱心に疎開を勧めていたが、沖縄近海にも敵潜水艦が出没し輸送船や商船が撃沈され“魔の海”とされていたため、疎開に踏み切る決心がなかなかつかなかった。しかし根気づよい学校の勧めと、娘の希望、海上の不安は大きいが輸送は安全な軍艦という事で疎開をさせる事になった。

◇　乗船、出港の様子

当時私は、膝の関節炎を患い安静療養中で見送りにはいけなかった。

出発の前夜は心ずくしのご馳走をつくり家族揃って夕食をとったが、いつもなら談笑で楽しかるべき夕餉だが心なしかさびしそうに感じられた。出発当日は母親はあれやこれやと細かいことまで気を配り注意していた。朝風呂をすまし、身支度をして、母親と３人で家を出るときは嬉しそうで、まるで旅行にでも行くようであった。別れるとき、

「先生のお話はよくきき守るんだよ。生水を飲まないように。悦子にも気をつけてよ。悦子は姉さんの言うことをよく聞くんだよ。姉妹仲良くするんだよ。」

と、注意と励ましを繰返して見送ったのだった。

見送りから帰ってきた妻が真っ先に言ったのは、船は軍艦ではなく対馬丸という大型輸送船であったという事だった。午後３時頃から那覇港沖に停泊している対馬丸へ乗船するため二隻の船艇で何回も運び５時すぎ出港したようだ。軍艦でないことで一抹の不安はあったが、駆逐艦二隻が護衛するというから大丈夫だろうと自分に言い聞かせていた。

◇　対馬丸遭難とその模様について

学童疎開は、戦闘上の国策として実行され、対馬丸には国民学校学童を中心に付添人、一般を含めて１，６６１名が乗船していたが、その内救助されたのは１７７名（内学童５９名）で、１，４８４名（内７６７名）の尊い生命が一瞬にして海底に沈んだ、生涯忘れることのできない、凄惨を極めた悲劇であります。

対馬丸は昭和１９年８月２１日午後６時３５分那覇港を出港し、翌２２日午後１０時過ぎに奄美大島十島村悪石島沖で、米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没し、年端いかぬ学童の尊い命を奪ったのです。

遭難の模様について聞くところによると、子供達は乗船して二日目の夜に入り、つかれもでて、暑い夏の夜を船倉で寝ていた者、涼をしながら甲板に仮眠している者など、静まりかえった、夜の１０時１５分頃だったといわれている。

突然ドシンというものすごい音に目が覚め、ざわめきが起こった。

気がついた時には船体はほとんど沈みかけ、船上は修羅場と化し、海へ投げ出されるもの、甲板にひしめきあった。

そして、浪の渦にのまれ、「おとうさん。おかあさん。先生。助けて、助けて」と泣き叫び、悲鳴をあげながら海に沈んだのです。また、ある者は、筏や救命具、浮遊物にしがみつき、夜は冷たく、昼は照り付ける太陽の下で大海を４～５夜も漂流しつづけ、そのしがみついた筏からも一人減り、二人減りと、言葉でいい尽くせぬ、惨事となったわけです。

「おとうさん」「おかあさん」と叫んだあの姿を思い浮かべるとき、胸がつまり、涙してなりません。

対馬丸のこの痛ましい悲劇は二度とあってはなりません。

◇　対馬丸遺族会の結成について

１９５０年、牧志町に住む久高将秀が奄美大島の人から奄美大島の宇検村に対馬丸遭難者の遺体が埋葬されていることを聞き、遺族の浦崎康華、又吉康福らに図り遺骨収集の相談をまとめ、沖縄民政府に協力方を懇請した。

沖縄民政府では広告によって遺族を招集し、１９５０年１０月１５日の那覇市壺屋小学校において対馬丸遭難者遺族大会を催した。

那覇市長当間重剛は、あいさつで「疎開者中多数の犠牲者を出した那覇市としては適当な土地を選定し、ひめゆりの塔のようなりっぱな碑を建立し、香華のたえないようにしたい」と述べた。この大会で疎開船対馬丸遭難遺族会を結成することを全会一致で決定、下記の事項を決議した。

＜目　的＞

１　毎年８月２２日に慰霊祭を執行すること。

２　対馬丸遭難者死亡者を祖国防衛の尊い犠牲者として適当な処遇をして貰うよう本土政府に請願する。

３　引き取り人のない遺骨は魂魄の塔に合祀すること。

４　疎開船対馬丸遭難者遺族会は沖縄遺族連合会に加入する。

◇　昭和２９年以来厚生大臣に対し度重なる請願や陳情を行っていますが、その当時の遺族会の活動状況について。

昭和２９年９月に遺族会は厚生大臣への請願を行った。①遭難学童に対して、戦闘参加犠牲者に準ずる処遇をしてもらいたい。②対馬丸の船体を引き上げ遺骨を故郷の山に葬らしてもらいたい。③靖国神社に合祀してもらいたい。という内容であった。

請願に対する本土政府の正式な回答はなかったが、日本政府の南方連絡事務所を通じ、あるいは、琉球政府主催の戦没者慰霊祭に臨席の厚生省援護局長らによって「適用する法令がないので実現困難」ということが伝えられた。それでも遺族会としては、琉球政府や立法院、市町村長会、遺族連合会等の協力のもとに忍耐強く運動を続けた。また、引き取り手のない遺骨は魂魄の塔に合祀した。

◇　昭和３５年に協力要請した東大学長、早稲田総長等との関わり

沖縄はアメリカの施政権下に置かれ、琉球政府は外交権がなく政府への陳情運動は自力に頼るしかなかった。厚生省の関係者は対馬丸問題に同情と理解を示してくれたが、援護法の厚い壁を理由に対応は冷たく、取り付く島がない状況だった。それでも陳情が毎年行われ。更に陳情をより強力に押し進めるため、以前教育研究集会の講師として沖縄を訪問された際、滞在中の案内役を務めて御縁のあった新里会長が茅学長に協力をお願いし橋本龍伍衆議院議員を紹介してもらった。

同じ頃、郷里の大先輩である大浜総長に協力を要請、早速熱心に関係議員の協力を懇請して下さった。両先生は後に沖縄協会会長になり、終始対馬丸問題に協力して下さった。

◇　昭和３７年、４７年に要綱が制定され、それぞれ見舞金が支給されていますが、その活動の経緯について。

南方同胞会は　遺族会、沖縄遺族会、床次、茅、橋本諸先生方の協力のもとに、昭和３７年２月には「沖縄戦戦闘協力死没者等見舞金支給要綱」が制定され、疎開学童の遺族に対し２万円の見舞金が交付された。

昭和４６年には、遺族会、遺族連合会が①遭難学童の準軍属処遇　②一般遭難者に対する処遇　③対馬丸船体引き上げ。という内容の陳情を行った。遺族会はその実現に向けて強力に運動を展開、沖縄選出の国会議員を中心に関係方面に強く働きかけ、見舞金ではなく準軍属としての処遇を求め強く要請したが、大蔵省の第一次内示には計上され

ていなかった。これに対し「沖縄の遺族処遇を軽く扱かわれている事憤懣にたえぬ。安心して復帰出来るよう、要求全額認めるよう強く要請する」との電報を関係方面に打つた。最終的には見舞金の支給が決定した。

昭和４７年８月に「対馬丸遭難者の遺族に対する見舞金の支給に関する要綱」が制定され、一般遭難者の遺族に対し３万円の見舞金が交付された。

◇　昭和５２年には「特別支出金に関する要綱」が制定されましたが、これに至る遺族会や県内外の動向について

昭和５１年は「ウワイウスーコー」の３３年忌の年で、今年こそ何とかしなければとの悲壮感がみなぎり、新里会長を中心に全国遺族会と共に一層運動を強めた。連夜の激しい運動で対馬丸遭難学童のおかれた特別の事情が認められ、昭和５２年度政府予算設定の段階で、当初、厚生省は特別給付金としての概算要求をしていましたが、急きょ沖縄開発庁に特別支出金として計上されることになった。

昭和５２年１０月に沖縄開発庁で「対馬丸遭難学童の遺族に対する特別支出金に関する要綱」が制定され特別支給金が支給された。

◇　遺族も年々高齢化が進んでいますが、遺族の思いをお聞かせ下さい。

亡くなった子供達のことは寸時たりとも忘れられない。せめて対馬丸の沈没場所を確認し遺骨を引き揚げていただけないものかと願っている。

この悲劇を二度と繰り返さないために、小桜の塔を聖地として管理してほしい。

ダバオに関する手記

ダバオ会沖縄支部長
仲村　源照

○フィリピン移民の始まり

１８９８年（明治３１年）これまでスペインの支配下にあったフィリピンはアメリカ国の領有下におかれることになった。そしてアメリカ政府による新たな開発計画が施されたそのひとつに１９００年（明治３３年）フィリピン国の夏の都とバギオの主幹となるベンゲット道路の建設が着手された。工事は予想以上の難工を極め、勤勉且つ忍耐強い日本人労働者の起用が目されることになった。

当時貧困生活に喘いでいた沖縄はハワイ、南米（ブラジル、アルゼンチン）への海外雄飛が高く叫ばれていた中にフィリピンへの出稼ぎ労働の要求は地理的にも近いことから大いに嘱望されるところとなり、若者多数がベンゲット道路工事の建設に従事することになった。

難関を極めたベンゲット道路工事は日本人労働者の投入により見事完成することが出来、日本人労働者の勤勉且つ忍耐強さはフィリピン国に於いて改めて高く評価されることになった。

１９０３年（明治３６年）ベンゲット道路は完成された。完成後、一部はそれぞれの故郷へ引き揚げたものの大部分がマニラへ止まり、引き続き大田恭三郎、大城孝蔵（金武町出身）のリーダーによる新たな計画、ダバオの新規開拓に従事することになった。

○ダバオの開拓

１９０３年（明治３６年）第一次ダバオ開拓移民としてダバオの新規開拓が着手された。

当時ダバオの全くの未開地で住民は土民（バゴボ・マンサカ・モロ・アーター）等各種族が原始的な生活を営んでいた。土地は殆どがバゴボ族の支配下におかれ、各酋長により管理領有されていた。ダバオへ上陸した第一陣は既に入植に着手のアメリカ人のアバカ（麻）栽培が船舶用ロープの材料として世界的な需要があることから、本格的な麻栽培入植のための開発に着手することになった。土地の賃貸は耕作売上高の一割を地主に支払うこととしてそれまで何等の収入も得られなかった。

第一次世界大戦の影響もあり麻の価格も上々にあったことから開発は凄まじい勢いで進行していった。これに乗じて日本からの移民は急激に増えその数は２万数千人にも達した。特に沖縄からの移民は邦人の６０％を占めるに至った。こうした急激な日本人移民の増大と土地の開発はフィリピン政府の注目をひくことになり、遂には幾多深刻な土地問題を併発するに至った。併せて麻価の暴落等、昭和２０年の敗戦まで続いた４４年間のダバオ開

拓の歴史には幾多の紆余曲折はあったが、他に類を見ない一大日本人社会を形成し、これは敗戦の昭和２０年まで続いた。

○移民地ダバオの特性

地主より一括賃貸契約のもとに個々に分譲開拓することにより開発面積は急激に拡大され、それに伴う耕作労働者の需要が増大していった。労働者は主としてビサヤ地区（セブ、ボホール、レーティ等）の島々から出稼ぎ労働者として主に単身で各日本人開拓者の家庭で就業することになった。労働賃金も高く支払いも確実なところからフィリピン人労働者は年毎にその数を増していった。開拓当初は全くの未開地のため生活上は衣食住共極度の不便を来していた。順次、食料品、衣料品、雑貨、散髪店等の日本人（一部華僑）店等が進出してくることになり、ダバオ、ミンタル、カリナン、トリール等各地域に町が必然的に形成され、更に人口の増加と共に凄まじく発展していった。麻の生産拡大と共に太田、古川等の麻（他に外国人による会社も数社）設立され、の関連傍系会社を始め開拓に必要とされる軽工業、レストラン、ホテル等各種企業が日本人により開業され開拓十有年にしてジャングルに閉ざされていたダバオは一転して確固たる日本人社会を形成するに至った。

○移民地ダバオの生活状況

常夏の熱帯地ダバオの開拓には四季の別なく、又適量の雨量と肥大した土地は麻の栽培、野菜、果樹に至るまで自然的に繁茂成熟し、肥料、薬品等の使用は一切なかったと記憶している。

四季を通して麻の生産は行われることから常にフィリピン雇用人は各家庭に十数人常駐していた。寝食を共にしていた家庭が殆どで、主従関係はむしろ一家の家族同様に和やかなものであった。雇用人との会話は通常チャボカノ語（スペイン語とビサヤ語の混合語）が使われていたが相互会話の上で不便を来すことはなかった。

熱帯の自然気候に恵まれていることからフィリピン人は元来怠惰な国民とされ、集中的に仕事に務める者は少なかったが、これは日本人社会には通用しなかった。必然的にダバオは日本人の入植以来勤勉なフィリピン人を自然的に養成することが出来た。これは戦後ダバオを訪ねた際、数々の現地長老から直接耳にすることが出来た。正に日本邦人が残した偉功だと思う。

○ダバオの教育環境

開拓地が広い範囲に拡大していく中に子弟の教育問題はダバオ日本人社会に大きな課題

となった。

麻栽培農家（子弟を持たない農家も）の寄附によって１９２４年ミンタル校等の日本人小学校の設立を皮切りに各耕地に次々と学校が設立され、１９３８年のワガン小学校の設立まで、その数は１３校にも及んだ。日本国内の小学校と違うところは４月から始まり３月に終了する学年が１月～１２月となっていた。

又当時のフィリピン学校法に基づき各校に１名乃至２名のフィリピン人教師が派遣され、２年生から英語教育が施されていた。学校校舎は床高の平屋で雨天には床下が運動場代わりになっていた。

建築資材は屋根はトタン葺きに壁、床は全てチーク材が使用され床には自分の影が写る程の光沢があり、松、杉材を使っていた内地の学校とはかなりの差があったものと記憶している。

１３校中高等科を設けた学校は、ミンタル、ダバオ、カリナン、ダリアオンの４校のみで小学校終了後は最寄りの高等科所有学校に移校していった。従って地方耕地より遠い生徒は各々学校寄宿舎又は知人の家に下宿をして通学した。

ミンタルには唯一のミンタル女学院（女学校）があり、女子生徒には憧れの的だった。男子にはタバコ農民道場（農学校）があったがそれ以上のものがなかったので上級学校へ進学する者は内地へ帰るか、さもなくばフィリピン人学校を選択する以外なかったが、皇民化教育が徹底に植え付けられていたことと当時英語はダバオに於いてはさほど重視されなかったことで親の後を継いで麻栽培又は他の仕事に従事する者も少なくなかったと思う。

何れにせよダバオの小学校教育は各学校共に生徒数が少なかった影響もあったと思うが内地に進学で帰る者は全て中学校、女学校へすんなりと合格することが出来たことからしても可なりレベルの高い教育が施されていたものと思う。

○日本軍に占領されたダバオ

昭和１６年１２月８日いきなり発生した大戦は即にダバオ在留邦人に大きくのしかかってきた。アメリカの領有下にあったフィリピン国にとっては極く当然のことから男性、婦女子に別けられ各耕地の日本邦人は全員がフィリピン兵に捕らえられダバオ市内の学校施設に強制収容されることになった。

而し一瞬にして楽天地ダバオは日本兵の占領下におかれ、日本軍政の為すがままに忠実に従わざるを得なかった。直ちに現地人の粛正がなされ、大戦勃発時邦人を捕らえた者は悉く捕らえられ死刑にされた。又これまで日本人と親しく日本語をいささかなりとも解する者はスパイになる可能性を秘めたものとして殆どが処刑に処せられた。バヤバス小学校の英語の先生二人とも学校の裏山に連行され銃殺されたと聞いた。

鬼畜日本兵の狂暴は学校の父兄すらこれを制止することが出来なかったと言う。